比企の畑から

主人公たちの起源

小宮山　洋夫

今年は、関東地方は、カラ梅雨で終わった。そのため、比企の畑を耕してはじめて、極度に緊張した夏を体験した。

川沿いの低地の畑でも、野菜をつくっているM氏は語っていた。

「あちらの人たちは川から水を汲んで、野菜にやっていますよ。ぼくは腰を傷めているからあげないけど」

通常、大地の畑では、極端に小雨の地域を除いて、苗の植付けの外、水やりの必要はない。水を好むキュウリが気掛かりだったが、ぼくは、天然の雨をひたすら待ち受けていた。

乾いた畑の中で、キュウリが実をつけてしまった。初物を切り取り、かじってみた。その鮮烈な苦み。口の中がビリビリして、顔がひきつってし

まう。キュウリはそれでも実をつける。採った実は、カマで頭を切り取り、苦みの有無を確かめるため、切り口をなめてみる。どれも苦い。そのうち舌の上に薄い紙のような異物を感じた。舌の表面の皮膚がはがれてしまったのだった。

さらに雨に恵まれなければ今後実をつけられないかも知れない。キュウリとしては、過酷な環境のもとにつけた実は貴重だ。鳥や動物たちに食べられては大変。種族保存のために、思い切り苦くして食害を防ごうとしたのだろう。

幸い、その後、二度にわたる雷雨の襲来で、畑の野菜たちは生き返った。降雨の後のキュウリの実には、苦みはなかった。

キュウリの古里は、ヒマラヤ南部山麓。赤道西風（モンスーン）の働きで、雨に恵まれている地域である。

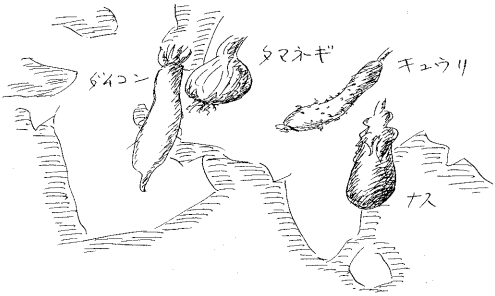
ナス、キュウリが旧大陸生まれなのに対して、トマトは新大陸の水はけのよいアンデス高地に起源した。土の乾燥に強いので、カラ梅雨の今年は、むしろ例年より出来がよかった。

「はじめての美しい、おいしいトマト」

わが家のトマト好きな批評家から、及第点をいただいた。

冬の畑の主人公、キャベツ、ブロッコリー、カリフラワーなどキャベツ類の原種は、ヨーロッパ西海岸から、地中海沿岸にかけて自生している。

低温に強いタマ



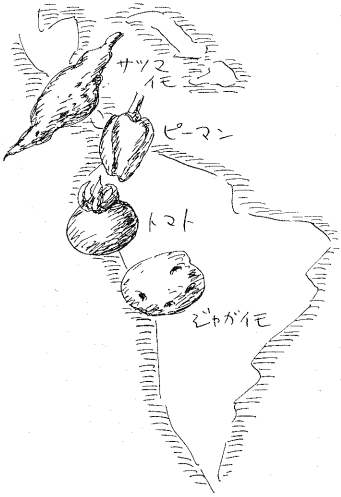
ネギは、トルクメニスタン、ウズベキスタンなどカスピ海東南地域で、ダイコンは、コーカサス、パレスチナ地方で起源したといわれる。

野菜づくりは、野菜の起源地をイメージしながら取り組むと楽しい。また、大きな錯誤を避けることができる。

昔から人々は、世界の起源をはじめ、人間、文化、作物の起源について思いをめぐらせていた。本能が衰弱して、動物界から、楽園から追放された人間は、世界を全的に把握しないと、安心して生きていけないからである。彼らは想像力を駆使して、物語をつくった。

作物起源の物語の一つに、インドネシアのセラム島に住む、ヴェマレ族のハイヌヴェレ神話がある。

アメタという男が狩りに出かけた。逃げたイノシシが池に溺れた。イノシシの牙には、ココ椰子の実がはさまっていた。アメタはそれを、土に埋めた。



ココ椰子が生え、花が咲いた。アメタと花を切り取り飲み物をつくろうと木に登ったが、指を切り、血が花に流れた。

九日後、花の上に一人の少女を発見、アメタは家に連れて帰り、ハイヌヴェレ（ココ椰子の枝）と名づけた。

祭りの夜、地面に掘られた穴に落とされ死ん

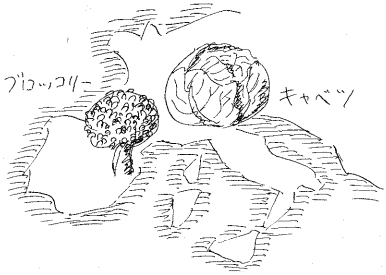
だ。

アメタが娘の遺体をバラバラにして、土に埋めると、いろいろなイモ類に変化した。

（『神話学入門』　大林太良　中公新書）

古事記のオオゲツヒメ神話も、この系譜に入る。スサノウに殺された女神から、五穀が生じている。

枯死した植物が、春、ふたたび芽を伸ばす。植物の遺体は分解され、新しい「生」の養分になり、「生」を支える。そこには、生、死、再生のドラマがある。ハイヌヴェレ神話は、女性の生命を生み出す力を、植物の生を、凝視するなかから、誕生したといえよう。女神の死は、栽培文化をもたらした。



「死」は、新たな「生」をもたらす、「死」は生の前提なのである。

ここには、死から生をながめる眼差しがある。私たちは通常、「生」から「死」を見つめている。そして「自己」の消滅を恐れる。

けれども、死は新しい生をもたらす、新しい生を保証するという思考は、「死」を「生」に連続させている。

そこに昔の人々は「生」の安定を見いだしたのだろうか。

（家庭菜園研究家）

☆このシリーズは今回で終わります。